

一〇 資金活動

どんな運動でも舞台裏というものがある。ロシア革命史を読むと、誰でもボルシェヴィキがあれだけ猛烈な活動をしたその物質的エネルギー源は、何処から、誰が調達したものだろうかと考

えるであろう。しかしそれを明らかに発表することは、その運動の公的な活動にとっては、個人の生活におけるプライバシーを犯すことと、同じことになりがちである。政治資金というものは、明らかにされない面を常に持っている如くである。バクーニンは、その生活費と活動費とをシンパの献金と借金と原稿料とに負っていたことは明らかにされているが、レーニンがその生活費と活動資金とを何処から手に入れていたかは、寡聞にして私は詳細を知らないものである。あながち私の無知によるだけではあるまいと思う。勝利した党の公式発表を鵜呑みにする者は誰もいないだろう。そしてこれを追求し過ぎると、反革命とされる危険すらあるのである。例えば明石大佐についての伝説、偽造紙幣計画、スターリンが関係したと言われる強奪事件等々の、真偽のほどは私の知るところではない。ただ二見の偽造紙幣計画にヒントを与えたのは、レーニンであったということは彼の語るところであった。しかし断わっておくが、二見の偽造紙幣による経済界の攪乱という計画が、レーニンの計画のなかにあったと言うのではない。

党の運動は結局失敗してしまったので、権力によって舞台裏の総てを曝露されたのであって、この舞台裏的活動が、党本来の活動よりも、むしろ《事件Ⅴ》の主役になってしまった。これは、言いかえれば、未だ弱体のうちに潰滅させられたからであった。資金を手にいれて、飛躍しようとする前に、その資金獲得のための活動に失敗して、総てを失うという結果になってしまったのである。それ故、この事件を語る時には資金獲得のための活動についても書かなくてはならな

くなってしまふのである。

党の最初の資金は二〇〇円であったことは前に書いた。今の金にして十四、五万円であろう。規約を討議した時、党資金は原則として、党費と寄附金によって賄うことと定めた。けれども党費納入を黨員に求めたことは一度もなかった。しかし中執は各々収入に応じた党費を納入していた。しかし当時、植村には原稿料収入などがあり、私は教師としての給料があっただけで、二見も入江も無収入だったから、彼らから党費を徴収することはできなかった。党は原則として、黨員を職業的革命家と規定していたので、彼らの生活費は最低額をむしろ党が支給するのを建前としていたのである。

寄附金としては、小野十三郎が四〇〇円出してくれたのが最高だった。相場師の斎藤某はその時張っていた相場で利益が得られたら、利益金の半分を提供すると約束してくれたが、その相場は失敗に終り、一〇〇円の寄附をしてくれただけだった。彼は当時新聞の相場欄に登場する大手の相場師であったから、彼の目算通りに行けばわれわれは一〇〇円以上の寄附金を得られたであろうが、残念ながらそうはゆかなかった。また信州に住んでいたかつての大杉の後援者は、警察がうるさいのでと恐縮しながら五〇円を提供してくれたので、私たちの方が恐縮したことを憶えている。この紹介者は岩佐老人であった。老人にはバクーニン全集を続刊すると話したのであるが、この点で老人に対して心苦しいことをしたと思っている。老人は既に故人になってしまっ

たので詫びることが出来なかった。

二見は株式短期取引の証拠金さえあれば、相当の金を手に入れることができると思ひ満々として語っていた。中執は二見の言う通りにはならないとしても、自信があるのならやってみいと賛成した。結局は二見は失敗に終わったものではあるが、党費（二見、入江の生活費、活動費、関東地方委員会の活動費など）を一年近くこれで賄ったのであるから、収支決算は黒字だったのでなからうかと思っている。

財政局の計画としては、活動資金が継続的にはいつて来る方法を講ずることを第一に考えていたので、二見の株式取引も、この資金を作ろうという目的を持っていたのである。それは営利事業を営営して、その利益金を党に提供するという計画であった。営利事業としては食堂とか喫茶店の経営の他に、党の印刷物を印刷したり、保管したり、偽造紙幣の製造工場を作る目的も併せて考慮して、印刷とか、製紙とか、運輸、倉庫業を選定していた。二見の株式取引が収支決算としては黒字だったとしても事業の経営資金にできるほど、ある程度まとまった金を一時に手に入ることはできなかった。結局は失敗だったと言わざるを得ない。この経営資金を入手するために、二、三の非合法的計画もあり、実行しようとしたが、いずれも失敗に終わった。

このように財政局が資金問題に一応の解決を与えることが出来ないでいるうちに、党組織の方は次第に拡大して行き、党パンフレットが特高の手にはいつて、党の存在を探知されてしまうと

いう事態が生れたのである。私はこの事態を説明して、財政局に緊急に資金を作る方法はないかとたどした。

「一挙にまとまった金を作ろうと思えば、なるべくしたくないが、やるか（強奪のこと）」と二見が言った。「失敗したら万事終りだから、武器が必要だ。一緒にやる人は二、三心当りがあるが、武器を買う金を先ず作らなくてはならない。金があれば、買う方法はいくらもある。君も一緒にやってくれるかね」

「一緒にやろう」と私は答えた。

この話合いで、強奪計画は実行に移されることになった。

八月末、同志浅倉トクノの犠牲的精神によって得た三五〇円の約半額を持って、二見は大阪へ行った。武器を購入することと、神戸か大阪で強奪計画を実行に移すことにしたのである。

「神戸へ行けば手にはいると思うが、こっちでも探してくれ」と言つて二見は大阪へ出発したのである。

私は藤田勉のことを思い出した。彼は藤田浪人といわれた有名な社会主義者の父親の関係から左翼にも右翼にも顔が広がったのである。私は藤田に連絡をとった。私が拳銃が手に入れられないかと相談すると、彼は目を輝やかして言った。

「君が使うの？」驚いた顔をして私を見つめた。しばらくして言った。

「二見君には渡さない方がいいと思う。あの人は、そんなものを持つと、すぐ使いたくなるんだね。うずうずして来るんだね」

私が自分の護身用に持つのだと説明すると彼は納得して、二、三日待ってくれば、出来るか出来ないか見当がつくと言った。

約束の日に会々と、「あることはあるが、随分高く吹っかけているが、どうする?」ときいたので、買ってくれと答えた。

彼は拳銃が二見に渡るのではないかと未だ疑っていて、しきりに二見君には渡さないでくれと繰り返していた。

数日後、銀座の資生堂で会った。彼の持って来た新聞包みを封筒と何気なくとりかえた。そしてコーヒーを飲んで、雑談して別れたが、この日も彼は、

「あの人はすぐ使うから危なくて仕方がない」とまだ言っていた。余程、気になるらしかった。彼は以前に二見が拳銃を持って、牟田征紀らと、強奪を計画したことや、芝浦の争議の時に、重役邸を爆破するのと言ってダイナマイトを用意したりしたのを知っていたのかもしれない。もっとも私はそのダイナマイトが千葉の何処かの海岸にかくしてあるという話は、二見から聞いたが、本当にあるかどうか疑わしいと思っていた。植村の回想によると、二見、寺尾、牟田、小野長五郎がそんな計画を立て、千葉の鵜原海岸附近の山中に埋藏したと書いているが、私は今でも

その存在を疑わしいと思っている。

藤田から拳銃を受け取ると、その足で川崎の坪田吟一郎の家へ行って、小包に作った。プロローニングの小型拳銃と実包百発だったから、相当重量があったので、あれこれ考えて硯という名目で発送した。坪田は東京都の土木課に勤めていた。会えばテロリズムの実行のことと、餘釣りの話だけをしている気のいい男だった。彼が以前に、二見らの強奪計画に加わったことがあるなどとは信じかねるのであった。

二見から折返し品物を受取ったという手紙が来た。そして武器が手にはいったから、こちらで計画を実行する。小林一信、井上信一、芝原淳三を同志に加えて、何処を襲うべきか調査を進めていると報告して来た。

次の手紙で、いよいよ神戸の中国人の富豪某邸を襲撃するが、計画が成功した時は、井上と小林を東京へ逃がすから住居の用意をたのむと言って来た。私は伊藤を通じて、三輪に部屋を借りて、彼らの帰って来るのを待っていた。

間もなく、彼らは来ないで二見の手紙が来た。そのなかで、彼は特務機関員の党規違反の処置は、中執の承認を必要としないのではないかと質問して来た。どんなことが起ったのかは何も書いてなかった。私は党員の処置は原則として党中央部の承認が必要だが、緊急の場合で中執を開く時間がない場合は、事後承認を求めたらいいと返事した。この返事がどんな結果を生むか予想

もつかなかった。当時、中央部は植村と二見と私の三名だけだった。入江は党活動を放棄していたからである。二見は神戸へ行っている。そこで私は二見からの具体的な報告を待って、植村に話そうと思っていた。ところが二見が帰って来てから聞いた話は、植村にも誰にも話をしない方がいいと判断して、遂に植村に話さなかった。

続いて来た二見の手紙には、いよいよ三名で実行する。襲撃目標は駒ヶ林郵便局にきめた。例のものは、山へ行つて試してみたが、具合はいいと書き添えてあった。言うまでもなく例のものとは拳銃のことと了解した。

それから私は毎日何種類かの新聞を詳しく読んだが、神戸で事件が起つた様子はなかった。そのうち二見から突然、三人で東京へ戻ると言つて来た。

電報で通知して来た時間に指定して来た新橋駅へ行くと、三人が列車から降りて来たが、何となく、みんなひどく落付かなくて、駅などという危険な場所からは一刻も早く早く離れたがつている様子に見えたので、小林を三輪へ、井上を高円寺の野村孝司の家へ行かせた。二人が行つてしまうと、早朝なので誰もいなかった駅のホームの待合室で、二見から急に帰つて来た理由を聞いた。

井上を野村の家へ同居させることにしたのは訳があった。

野村は二見の少年時代からの友人であった。彼の兄は経済雑誌を発行していて、その事務所を

私が連絡場所として使わしてもらっていたのである。彼は兄の雑誌を手伝っている風でもなく、いつもぶらぶらしている様子だったから、私は彼がどうして生活しているのかわからなかった。彼は松原に自分の仕事を話して相談にのってくれたのんだ。

「野村はつまらんことをしているが、君達には何かの足しになるんじゃないか。会つてみたらどうだ」と私に話があったので野村の家へ三人で出掛けてみた。彼のやっている仕事というのは株券の偽造だった。彼が作った株券（王子製紙株券）を見ると、本物とは印刷の色が一目で違ふと判るような代物だったから、これでは使いものにならないと思った。しかし本物と同じ意匠のものを作らせて銅版屋によく怪しまれなかったものだと感じた。

野村はここまで作るに至った苦心談を話してくれた。

「色がどうしても同じように出ないのだが、もう一いきだと思う。君の方でいるのならみんな譲つてもいい。君の方には印刷工がいるだろうから、色を合わせるのが上手な技術を持った人がいるだろう」

二見も私も株券を偽造する気はなかった。紙幣なら印刷してもいいが、その時にはもっと違った方法があると思った。

誰から聞いたのか忘れたが、井上は銅版印刷かオフセット印刷の技術者だということだった。だから野村の経験談を聞けば、何か参考になるだろうと思つて、野村にたのんで同居させてもら

うことにしたのである。ところが後に井上が印刷技術を持っているというのは間違いだとわかって、笑い話になったのである。

一一 麻耶山事件

二見が新橋のホームの待合室で話してくれたのはこの事件のことであった。

「実は君にだけは話しておかねばならない事があって、急に帰って来たのだ」と彼は話した。

神戸へ着くと、彼は大阪や神戸の同志とは連絡をとらずに、山手のアパートを借りて、そこを拠点にして活動をはじめた。かねて同志に加えておいた井上、小林、芝原を呼んだ。そして芝原には拳銃の入手方を依頼した。芝原は自信あり気に即座に引き受けた。井上と小林には、資金強奪のために襲撃する目標の調査を依頼した。

井上と小林とは神戸の中国人の某邸と駒ヶ林郵便局のどちらかがいいと報告して来たが、芝原からは、すぐにはむづかしいという話だけを聞いていた。

「あわてたってあかへん。気長にやらんと」と芝原はいつも言った。

そこへ私から品物が届いた。小包を開けると小型なので、少しばかりがっかりしたと言う。こ

れは婦人がハンドバッグにでも入れて持ち歩く護身用だ。欲しかったのは大型のもつと強力な奴だが、とにかく手に入ったから、直ぐ決行しよう。愚図愚図していると、気持がだれるおそれがある、と思った。

もう何度も各自の役割は協議してある。あとは決行の日と時間をきめればいい訳だ。

決行の前日、最後の打合せのため三人が集まった。芝原は襲撃には加えないことにしてあったからである。協議事項の再確認をしようとすると、井上が「その前に話がある」と言い出した。

彼が言うには、どう考えても芝原が周囲にいては危険だと思えて仕方がない。彼を加えたのが失敗だったと思える。理由は？ と聞くと彼は口が軽いから、事件が起るとわれわれがやったのだとすぐ勘付いて、あの事件をやった連中はオレにはわかっていると喋って歩くに違いない。そんな男なのだ。誰も知らないことを、自分だけが知っていると思うと、得意になってそれらしいことを喋らずにはおられない男なのだ、全く彼を加えたのは失敗だった、とくり返した。

これだけの話なら芝原を除外する理由は薄弱だが、井上の話だと、芝原が周囲にいる限り、われわれは何も出来ないということになりそうである。しかしそれは出来ない。是非とも此処で決行するのだ。決行しないと、もう何も出来なくなるかもしれぬ、と考えていると、井上が言った。

「現に芝原は、君が東京から金を持ってピストルを買いに来ているから、何かやる気だろう、と

話したことを二、三の者から聞いている」

聞かしてくれた者は信頼できる同志だから安心だが、と附け加えたが、もうおそい。彼は決意していた。襲撃の決行は延期することにした。そして、

「どうする？」と二人に問いかけた。二人ともだまっていた。冷たい時が流れた。

「仕方がない。どうにも他に方法がないと思う」と井上がつぶやくように言った。それは自分に言いにかけているように彼には聞こえた。

彼も小林も、井上が何を言ったか直ぐ判った。しかしすぐには決断できなかった。白けた空気が三人を包んだ。誰も喋らない。

「よし、そうしよう」と二見が決断した。

話がまるで違う協議になったが、三人には不思議でも何でもなかった。

「どうしてやるか？」

「麻耶山へ連れ出して、其処でやるのが一番いい。酒をさげて、栗拾いのピクニックと言えば、喜んでついて来るよ」と井上が言った。話はきまった。早い方がいい。井上が誘いに行った。

少し肌寒いが、秋晴れのいい天気だった。酒があるので、芝原は上気嫌だった。根が陽気な男だったから、独りで喋っていた。三人は陽気にはなれなかった。ともすると無口になった。

「栗を焼いて食おう」と二見が言った。しばらく四人は栗を拾うのに夢中になった。時々彼はや

めようかと思った。酒を飲んだら、そのまま帰ろうかとも思った。

栗を探しながら林のなかに入っていくと思いがけずに、木のまばらな空地に出た。

「此処で休もう」といって彼は傍の石に腰を下した。小林は栗を拾う振りをして、もとの道をもどって行った。彼は此処でやる気だなと思って、自分の割り当てられた役割、見張りに立ったのである。

枯枝を集めて焚火をして栗を焼いて、酒を飲んだ。酒は味がなかった。いくら飲んでも酔いもしなかった。芝原だけは、いつもの調子で、今のアナキストはだらしないとか、気焰をあげて酒を飲んだ。酒が廻ると彼の毒舌は次第に激しくなっていたが、二見は彼がどんなことを言っていたか、少しもわからなかった。一升の酒は忽ち空になった。

「小林の奴、何処へ行った」と芝原が醉眼をすえてあたりを見廻した。彼は酒癖がいい方ではなかった。

二見は決意して、ポケットからピストルを出して安全装置をはずした。それを見ると、芝原は目を丸くして叫んだ。

「あれ、何処で手に入れたんだ。早いことやったな」

「お前はスパイだから処分する。覚悟しろ！」銃口を突きつけた。

「スパイ？ スパイとは何だ。ふざけるな。証拠があるなら言ってみろ」と芝原は目を剥いて喰

ってかかった。

「オレが神戸へ来たことは誰にも言うな、と言っておいたのに、喋って歩いたろう」

芝原は沈黙した。そして「うん。それは悪かった」と素直に認めた。

「だからスパイとして処分する。服を脱げ！」

「スパイとは何だ！」と言って睨みつけたが「よし、脱いでやる」

上衣とズボンを脱いで放り出した。

「オイ。度胸だめしなら、もう止せよ。寒くてしょうがない」

「黙ってろ。いいか。射つぞ。覚悟はいいか」

「本気か？ よし射て！ そんなものが恐くて運動ができるか！ 馬鹿野郎」

悪態の限りを尽して罵倒した。

二見は引き金をひいた。ところが不発だった。カチリと音がしただけだった。

「何だ、オモチャか。丁度似合いだ」と言って傍の石に腰をおろした。

二見はピストルを分解して修理しはじめた。芝原は動かなかった。

「寒い。やるなら早くやってくれ」と言ったり、馬鹿野郎と罵ったりしていたが、立とうとはしなかった。井上は彼が逃げようとしたら飛びかかる心算だった。しかし彼は逃げようと思えば、逃げられた筈なのに逃げなかった。今逃げ出したら逃がしておこうと二見は思った。

ピストルの修理を終えると、二見は再び銃口を突きつけて言った。

「射つぞ。いいか」

「よし。やれ。また弾丸が出ないんじゃないかあるまいな」と言ってから彼を罵った。

二見は引き金を引いた。銃声が秋晴れの山にこだました。二発、三発。芝原の胸から血が赤い糸のように流れたと思うと、彼は前に崩れるように倒れた。彼の悪罵の声は途中で切れた。

二見はだまって井上にピストルを渡した。彼は芝原の後頭部を射った。

冷水を浴びたような寒気が身体中を震わせた。彼らは無言のまま芝原の脱いだ服を持つと、逃げるように空地を出た。下山の途中で服を焼いた。それから三人は殆んど何も喋らずに山を降りた。出掛けた時の緊張とは、別の緊張が三人をこわばらせていた。

「雪が消えるように消えた」と井上がつぶやいた。彼は家へ帰ると一晩中読経したという。彼は僧侶出身であった。

その時から三人は芝原のことに触れなくてはならなくなると、スノー君と呼んだ。芝原という名を口にするより、スノー君と言った方が気が軽かったのであろう。

二見は無意味なことをしてしまったのではないかと悔んだが、口にはしなかった。それにしても芝原は度胸のいい男だったと思った。何故、あの時逃げなかったのだろうか、とも考えた。そして計画を実行しないなら、無意味な殺人になると思った。

三人はもう一度決行の手筈を打ち合せた。

二、三日後の新聞に、麻耶山で変死体が発見されたという記事が出た。殺人事件としては扱われていないので、違うだろうと思ったが、井上と小林とは芝原の死体に違いないと言ってきた。芝原が殺されたとわかれば自分達が危ない。二人共、もう計画の実行などは思いもよらぬという口振りだった。これでは神戸にはいられない。

「こんな訳だ。まずい事をしてしまったが東京で決行しよう」と彼は淋しそうに言った。私は総てを聞き終る前に、大失敗だと思った。そして藤田の言葉を思い浮べた。だが、批判だけしていても何の足しにもならないと思い返した。

全党員の安全を確保し、党の組織の拡大を計ろうという目的を遂行するための資金活動は、彼ら三名の生命を守るといふ新しい目的が加わることによって、より一層緊急を要することとなったと思った。

一二 高田農商銀行襲撃事件

十分な調査をしてから目標を定めようという余裕がないというあせりが、彼にも私にもあったことは否めない。とくに彼ら三名には、それがひしひしと感じられていたことであろう。人間

の行動半径は大体において過去の生活環境に影響されてきまりがちである。全く新しい土地を調査し、そこに目標を定めるためには時間と金が必要になる。そのいずれもが不十分な場合には、いきおい過去の生活に近い処で、目標を設定したがるものだ。私たちも第一に選んだのが杉並の馬橋郵便局、次が駒場郵便局、そして最後に決定したのが高田農商銀行であったということは、この例にもれない。馬橋は植村の住居が近いので、しばしばその辺りを歩いていた。駒場はかつて私が住んでいた処であって、渋谷へ出るために毎日この郵便局前を通っていた。高田農商銀行は、目白に近く、二見はその附近の地理にくわしかった。彼の家は目白にあったからである。このような選定は非合法活動にとっては、最も拙劣な方法であった。

十月のある日(日時は忘却した)の朝、馬橋郵便局襲撃のために、三井剛を加えた五名は、それぞれの役割に従って配置についた。私は自動車を待機させて逃走を助けると共に、強奪した金を受け取ることになっていたが、余りに時間がかかるので、もしや全員逮捕されたのではあるまいかと、気が気ではなくなっていると、井上、小林、三井の三名が何事もなかったかのように、話しながらゆっくりと私に近付いて来た。中止したとは知らない私は、何を愚図愚図しているのだと思ってやきもきしていると、井上が近寄って来て小声で、今日は中止したとささやいた。タクシーを帰してから、私は井上から状況を聞いた。

「みんながそれぞれの配置についたのだが、見ると郵便局の前で新築の工事と見えて、今日は大

勢大工や人夫がはいっているの、これはまずいと思ったから、二見に今日はやめた方がいいと言うと、彼は、いつもの癖で顔色を変えて怒って、何も言わずに行ってしまったのだ。何処へ行くとも何も言わなかった。聞く暇もなかった位だ。仕方がないから帰ってもう一度計画を練り直そうと思うのだ」と説明した。

私は彼らと別れて、二見との連絡場所になっていた帝国ホテルのロビーへ行ってみると、はたして彼が待っていた。

「井上は駄目だ」と彼が言った。「いつも中止しようと言うのは彼だ。慎重なのもいいが、どうせ危険は覚悟したことなんだから、やってみるより仕方がないのに」とブリブリしていた。

「君に怒っても仕方がないね。四人でやろう。何度も決行するという処へ来て、中止すると、決意が鈍るよ。そう何回もやりたいことではないからね」と言って例のゲラゲラと首のする笑声を立てた。意気消沈している様子なので、

「元氣出せよ。これから自動車の練習に行かないか」と誘った。ホテルを出て、深川の東大工学部の自動車実習所へ行つて、二時間ほどボロのフォードで広場を走り廻つて練習してから銀座へもどった。すると今度は、彼の方が元氣になっていて、これから駒場へ実地調査に行こうと言いだした。そこで駒場へ出かけてその附近を歩き廻つてみたが、何となく具合が悪く思えた。

「車でもあればいいが、そうでないと具合が悪いと思うが」と言うと、彼もそう思ったとみえ

て、此処はやめることにした。

三井はこの計画に加わることを承知してからは、三輪で小林と一緒に住んでいたが、しばらくすると二人は喧嘩でもしたのか、三井が二見のところへ、小林と一緒に仕事をする気はなくなったと言つて来た。わけを聞いてみるとこんなことだった。

小林は何を考えたのか、金はどうしてもつくらなくてはならないのだから、二人で辻強盗をしよう。人の一人や二人殺してでも、金を奪うのだと言つたそうであった。小林が麻耶山事件に加わつて、ひどいショックを受けていることはわかるが、本当なら無茶な話だし、党はそんなことを指令してはいない。

「運動に生命をかける決意には変りはないが、あいつのように何が何でも、人を殺してでも金を奪うべきだなどというのは氣狂いだ。あんな奴とは仕事は勿論、一緒にいるのもいやだ」と訴えたのである。

そこで三井を特務機関からはずして、伊藤に協力させることにした。そのため三人で決行するより仕方がなくなった。

二見は高田農商銀行をやろうと言いだした。私は念のためその附近を歩いてみた。護国寺へ出る道を通れば、逃走することが出来ると思った。

決行の日は、陸軍大演習のために天皇が九州へ出発する六日の朝ときめた。その日は警備のた

め警察力は東京周辺から西へ集中するだろうというのが私の計算であった。前日は三人とも三輪に泊って、最後の打合せをした。二見と小林とが銀行にはいる。二見がピストルで脅かしている間に、小林が金をカバンにつめ込んで銀行を先に出る。しばらく二見は三〇秒か一分、小林をカバーするために銀行にとどまる。小林は私にカバンを渡して逃げる。二見は小林とは反対の方向へ行く。五分以上かかったら失敗すると思った。

早朝、私たちは銀行の近くまで一緒に行った。

「じゃあ、行くよ」と二見が言った。

「ああ、気をつけて。危ないと思ったら中止してもいいよ」と私が言った。

手を振って別れた。待つとは長いものとわかつてはいたが、実に長い長い時間だった。

待ちくたびれていると二見と小林が急ぎ足で戻って来た。二人共青い顔をしていた。

「駄目だ。逃げよう」と二見が言った。

私たちは大急ぎで護国寺の前まで出て、そこでタクシーに乗って三輪へもどった。

話をきくとこんな状況だったと言うことだった。二見と小林とは予定通り銀行へはいった。銀行を開けたばかりの時間だったから、行員は忙しそうに金庫から出した札束を数えているところだった。二見がピストルを突きつけて、動くなと言うと、みんな一斉にその場に釘付になった人形のように動かなくなった。誰一人声を立てる者もいなかった。彼はすぐ小林に目くばせし

た。するとどうしたことか小林も支店長に向ってナイフを振りあげて脅かしていた。すると一人の行員が口を開けて真青になりながらソロソロと、ドアの方へ動いて行くのが目についた。動くと思つぞと言つて脅かす心算で引金を引いた。するとまたカチリと音がするだけだった。万事休す。

「帰ろう」と小林に声をかけて、「冗談だよ」と言つて外へ飛び出した。一人の銀行員が今にもころびそうに丸くなって逸散に駆けて行くのが見えた。

「何故、小林がナイフなんか振り上げたのかわからない。札束が机の上に出ていたのだから、それを把めばいいのに。小林も駄目だから、今度は君と二人でやろう」

「そうしよう」と私は答えた。それにしてもひどく眠くなった。欲も得もないほどだった。

夕刊にはこの事件の記事が三段抜の大見出しで出ていた。ご丁寧に一人の男がピストルをかまえて、もう一人の男がナイフをふりかぶり椅子に掛けた男があっけにとられていた絵までそえてあった。それを見ても他人事のようにしか思えなかった。彼と私とは顔を見合わせて苦笑するより仕方がなかった。

「今日は眠りたい。考えるのは明日にしよう」と言つて別れた。

翌日、関東地方委員会に、私が捕えられた場合、中央との連絡方法について打ち合せた。そしてみんなも早く地下に潜入した方がいいと伝えた。

それから二見と会って二人で決行する計画を協議した。しかし二人だけの場合は自動車がどうしても必要だが、どうして車を手に入れるか、いろいろ考えたが、うまい考えが浮ばなかった。その上まるで力が抜けてしまったような気がするのだった。

「今はまだわれわれ二人だけを特高は探しているのだから、一応身を潜めれば当分は大丈夫だろう」と話しあった。